聖書日課『からし種』2024.9.29－10.6

9月29日 （日） エレミヤ 48章	**「モアブは破れ／叫び声がツォアルにまで聞こえる。ルヒトの坂を泣きながら上る声／ホロナイムの下り坂で、滅びの苦しみに叫ぶ声が聞こえる」（4―5節）。**戦火の中、苦しみの声が各地で上がる。「業（わざ）と富に頼った（7節）」人からも、そんなものに与れなかった人からも。主はその声に「笛のように嘆き（36節）」、私たちにもその声を聞かせられる。
30日 （月） エレミヤ 49章	**「盗人が夜来れば／欲しいものをすべて持って行く」（9節）。**聖書は旧約・新約を通じて「主の裁きの日」を語る。「盗人が夜やって来るように、主の日は来る（1テサロニケ5：2）」。しかし、十字架の主イエス・キリストによる罪の贖いを宣言する新約の下にある私たちは、その日を主の再臨の日、全ての人が悔い改めに導かれる日と信じて、目を覚ましていよう。
10月1日 （火） エレミヤ 50章	**「全世界を砕いた槌が、今や折られ砕かれる」（23節）。**今日と明日は、バビロンの滅亡を激しく叫ぶような記述に圧倒される。しかし、「バビロン」という一国を「悪の象徴」のように読むのは避けたいと思う。聖書はただ、人の力による支配がまた人の力で滅ぼされるという、人の歴史の愚かさを語っているのだろう。「剣を取る者は皆、剣で滅びる（マタイ26：52）」
2日 （水） エレミヤ 51章	**「バビロンは主の手にある金の杯／これが全世界を酔わせた。国々はその酒を飲み／そのゆえに、国々は狂った」（7節）。**バビロンが力を奮う中での、ユダ王国や周辺諸国の動揺と混乱を表しているのだろう。今の世界も、ある国々の軍備や資源、動静や関係に他の国々が揺れ動く。しかし、そんなあやしい金の杯も結局は主の手の中にある、と聖書は語る。

メール配信登録メール　senfkorn.obc@gmail.com　　大井バプテスト教会

聖書日課『からし種』2024.9.29－10.6

3日 （木） エレミヤ 52章	**「ゼデキヤは二十一歳で王となり、十一年間エルサレムで王位にあった」（1節）。**ユダ王国の晩年、ヨシヤ王から続く王たちはみな二十代であった。預言者エレミヤも若くして立てられた。主は、混乱の世に若い世代が新しい道を切り拓く機会を与えられたのかもしれない。なのに、彼らがことごとく苦しみと迷いの道を歩まされることになったのはなぜだろうか。
4日 （金） 哀歌 1章	**「御覧ください、主よ、この苦しみを。胸は裂けんばかり、心は乱れています。わたしは背きに背いたのです」（20節）。**包囲戦で飢餓に苦しんだ末、破壊された神の都の惨状。主に背かなければ安泰でいられたのかどうかは誰にもわからない。それでも、かつて背きに背いたその主こそが、苦しみの極みにあって叫びを向ける唯一最後の相手となってくださる。
5日 （土） 哀歌 2章	**「立て、宵の初めに。夜を徹して嘆きの声をあげるために。主の御前に出て／水のようにあなたの心を注ぎ出せ。両手を上げて命乞いをせよ／あなたの幼子らのために」（19節）。**「主の怒り」と表現される激しい戦争の中、「飢えに衰えてゆく」幼子らの姿が痛い。平和こそが人を守るはず。主の御前で利己心や敵意を悔い改めて、平和の御旨に従いたい。
6日 （日） 哀歌 3章	**「主の慈しみは決して絶えない。主の憐れみは決して尽きない。それは朝ごとに新たになる」（22－23節）。**今、世界中を覆う悲しみや暗闇を考える時、暗澹たる想いが心に広がるのを禁じ得ない。しかし、その私たちの心の真ん中に向かって「主の慈しみと憐れみは、決して絶えることも尽きることもなく、朝ごとに新たに届けられる！」と聖書は宣言する。ハレルヤ！

大井バプテスト教会